
武偵高deミッション！

奈々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武偵高deミッション！

【Nコード】

N6561X

【作者名】

奈々

【あらすじ】

武偵高に転入してきたルビ。

ルビはある目的の為に来た。

その目的は？そしてルビの正体は！？

(1) その目に宿る意思(前書き)

これはフィクション！

存在しないよ！！

なお、ホラー苦手な人はやめとこうね

（１）その目に宿る意思

とある晴れた日のこと。

高層ビルの屋上に一人の少女が立っていた。

少女の名前は新藤瑠美。
しんとうるみ

（以後瑠美はルビと書きます）

彼女はある目的を果たす為に長野から東京に来た。

そして武偵高にインターンで入るのだ。

* * *

今日は武偵高に入る日だ。

やっぱり、インターンではいるため、緊張はしてしまう。

そして私の最大の悩みは勉強。

もともと私は勉強が得意ではないし、インターンではいるため、

勉強が小６で止まっている。

なので高校の普通科授業ではついていけないだろう。

（そこは自宅でやるとかしかないな・・・。）

先生の方も知しているので、授業で当てられる事はないだろう。

（がんばるっきゃない・・・！）

と、こんな事を考えてる間に話は進んでたらしく、

先生が「入ってきて」、といったのが聞こえた。

緊張を表に出さずに教卓までたどり着く。

「じゃあ、自己紹介どうぞ？あ、最初に言っておくわね。

この子はインターンだということをわすれずに、ね？」

先生がそういうと周りがざわめいた。

何を言ってるかは分からないが、悪口ではなさそうなので、ほっとした。

「しっ、新藤瑠美です！ええと、いっぱい分かんない事も有りますけど、よろしく願いします！」

ペコッ

とりあえず、第一印象は良い物になったらしい。

そのまま授業は進み、二時休みになった。

*

*

*

「はあ・・・つ、疲れたあ。」

二時休みは質問攻めだった。息をつく時間も与えられないほど。

いまは強襲科塔^{アサルト}で練習中。

（あいつらを潰せる様に、頑張らなきゃ・・・！）

ぎりぎりど歯軋りをして、的を狙う目には集中の色、憎しみの色が宿る。

蘭豹「今日の授業は終わりやー！死にたくないやつはとっと帰れやー！」

こわっ！強襲科こわっ！！なに此处！！？

まあ、死にたくないで片付けて、帰ろうと門までいく。

「あ、ルビ！おそいわよーもっっ！」

するとそこには強襲科Sランクの神埼・H・アリアと

探偵科Eランクの遠山キンジがいた。
^{インクスタ}

ちなみに私は強襲科Sランクである。

アリアはアニメ声をあげてててっ、とこちらに走ってくる。

「おそいって・・・え？」

私、何かアリアと約束したっけ？

「何言ってるの？当たり前でしょ！一緒に帰るから、待ってたのよ？」

アリアはそう言って、かわいらしく頬をぶくう、とふくらませる。

「え・・・っ！待っていてくれたの・・・ありがとっ！」

ちなみにアリアとは二時休みと昼休みで超仲良くなっている。

「さ、帰るわよ！ホラッ、キンジもぼうつとしてない！」

・・・・・・あれ？

「アリア、そっちは男子寮じゃ・・・？」

私がそういつても、アリアはどうかしたの、みたいな顔で見てくるだけ。

「？ふつうでしょ？」

「いやいや、少なくとも普通ではない気がするよ？それに、キンジはともかく、

私たちは女子りよ」「何言ってるの。先生から聞かなかった？ルビはキンジと同室よ？」「・・・え？」

うつそーん？（、□、／）／

「嘘でしょ・・・?」

「本当よ?先生曰く『女子寮もう開いてないからあゝ』らしい」

「よし、先生を今度潰そう」

「ちょ!?!ルビ、爽やかに言っちゃだめな事を!?!」

「しかも清々しく言ってるな・・・(呆れ)アリアの発言のせいだ」

「~~~~~っ!ルビ!とりあえず今日は帰るわよっ!あたしもいるから!」

「え?ほんと?じゃあ・・・いいかな・・・?」

「「いいんだ・・・。」」

え?アリアがいるなら大丈夫だと思うし・・・疑問はどこにあるんだろ?

「じゃ、帰ろつか。」

「うん!」

「・・・」

という事で一日目、終了。部屋に帰ってからのことは次回!!--である! (↑作者の叫び)

(2) 改めて分かった事がいろいろ

ふう……ッ。皆さんお早うございます。

え？朝じゃない？むしろ帰宅時間だから夜だって？

………いいんだよ。そつとしいてよ。

と、私は現実逃避してい「るびいいい！手伝いなさいよおッ
！？」

台詞をさえぎるな、アリアよ。

「もう……なに？」

「何ッて！何ッて！？非道いよ！！？」

「きゃはははッ！アリアは理子の獲物なのでッ！」

「いやあああッッ！？ルビいいいいいいッ！」

………ノーコメント。OK？

何故アリアが悲鳴を上げているか？ソレは簡単。

理子の「玩具おもちゃ」になっているから。

「いやッ！誰がこんなもの着るかぁッ！」

着せ替え人形のオモチャに。

「理子・・・そろそろ放してあげよ？」

いいかげん五月蠅いあたしにS趣味はないので放すよう要求。

「ルビ・・・ッ！貴方は天使よ・・・！むしろ神様よ！！」

そんなに嬉しいのかアリアよ。

「むゝ。しょうがないなゝ。ルビがアリアの代わりになってくれるな」「アリア頑張れ。」「わゝいっゝ」

「ルビ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ッ!？」

私はアリアを見捨てることにする。やだよ!？犠牲になりたくないもの！

「ルビ・・・実行使でどうにかしてえ・・・!」(泣)

あゝあ。アリアが涙目に。

「たくッ・・・アリアはしょうがないわねえ。」

「ルビっ！ありがとう~~~~~!」

「ほら、理子、アリアを放して？丸焦げになりたいの？」

そっついながら私は、手のひらに火球を創る。

すると理子はビクツとした顔になり、

「わ、わかったよ・・・。もう、ルビったら可愛いのに怖い事して！ぶんぶんがおーっ！だぞっ！」

「あー、はいはい。可愛いとか嬉しくないから。むしろキモい。」

「えー！ー！ーッ！？なんでえ！？」

女の子なら嬉しいんだろうね、今の言葉。

いやア、アタシも女の子だけどさ？心が男なんだよ。

口調はこれだけど心はまだ完全に男だから。あーゆーOK？

つまり！！！！私は！！！！！！

テ・ン・プ・レ・者・で・す！！！！！！！！

はっはっはあーっ！おどろいたかあー！はっはっはっはっはあーっ
~~~~~  
↑

まあ緋ア原作キャラ3人に会ったし、いいよね。

しかもここにいれば、現キャラはワラワラよってくる！きゅぴーん  
ッ！d（　　）b

あん？緋アが何かって？緋弾のアリアの略だよ。わりいか？

「でも・・・ほんつとルビはずるいよね。そんな能力に恵まれてて。」

「ほんとよ！なんでそのれ・・・レイリヨク？とかいうのでできるのよ！」

「しょうがないじゃない・・・わたしにいわないでよ。」

「でもさー、りっこりん思っただけどー、なんでルビって自称男なの？どっからどう見ても女の子じゃない？」

「アッ！そうだった！その説明はまだか！！」

「第一、男っていう証拠は？」

「わかったわよ。そういうのなら、見せてあげる！ちよい待ち！」

私は自室へ向かった・・・。

\*\*\*

「ただいまー。」

理「おかえ・・・ってルビ！？そのカッコは！？」

今現在男物のだぶだぶ緩々服を着てる。

ア「ソレは証拠になんないわよ？」

「あたりまえじゃない。これが証拠でどうするの？制服だと男姿になった時困るじゃない。」

考えてください。制服はスカートです。以前に小さいです。

理「男姿って・・・なれるの!？」

理、理子。目をキラキラさせなくても・・・ってアリアまで!？

「早く!!!」

「はいはい」

そして私は銃を取り出した。そして、額に突きつけ、引き金を引いた。

「「え?」」

——————バアンツッ! ————

どさっ・・・。。

私は倒れ、意識が闇に落ちていった・・・。。

「うそっ！？ルビー!!」

「きゃあああっ！？頭を完全に貫通してるっ！弾が落ちてる――ッ！」

??「五月蠅い……………」

「「へっ?」」

\*\*\*

「ふう……俺の体、久しぶりッとお……………」

「「（ポカーン）」」

「ん?どうした?アリア、理子?」

「どっ、どうしたって…………誰?」

「ひどいなあ、アリアは……………」

するとしばらく黙っていた理子が口を開き、――

「銀髪イケメン…………ッ!!!!最高オオオオオオオッ!!!!」

ぴょーんっ！

俺へダイブ。

「・・・・・・・・・・バカだ？」

ひょいつ

どさっ！

ごーんっ！

「ふおおおおお・・・・・・・・・・」

説明しよう！

ひょいつ（俺がよける音）

どさっ！（理子が地面に落ちる音）

「ごーんっ！（起き上がるうとしたりこがテーブルに頭をぶつける音）

「ふおおおおお……」（理子のうめき声）

以上である。

「まったく……だいじょうぶか？ホラ」

ちよつとかわいそうだったので起こしてあげる。

「あ……／＼うつ、うん！大丈夫。／＼／」

「……？顔が赤いぞ？熱でもあるのか？」

頭をぶつけると熱を出すというのは迷信じゃなかったのか……！？  
これには興味が……！熱があるのか測りたい！

という事で冷静を装って（実際冷静）オデコトオデコをくつつけ、  
熱を測る。

「ひゃああっ！？ル、ルビい……／＼／」

？なんか理子が顔を赤くして恥ずかしがっているが……。

あの理子が恥らう事が合ったのか！てか、恥ずかしい要素はどこに  
あった？↑（鈍感）

ので聞いてみる。アリアに。

「理子はどうかしたのか？」

「「え．．．（自覚なし？）」「」

理子ともどもぽかーんとしている。

「なッ、なんだよ？呆ける要素はどこにッ？」

「理子。あきらめなさい。アレはキンジよりもタチが悪いわ。」

「えーーーーーッ!？」

「な、なんだよ．．．？それに、俺がキンジよりタチが悪いって何だよ？」

「「はあ．．．．（呆）」「」

「え、ええエ．．．．」

\*\*\*

「ところで有耶無耶うやむやになっていたけど、あんたいったい．．．？」  
そういつてきたのはアリアだ。

「説明すれば長くな「．．．．ごめん、短いわ。」

「wwで？」

「何気に笑ってンなよッ!?!?・・・はぁ・・・」。

俺はな、『素』なんだよオ。つまり、「新藤瑠美の真の姿」だ。

この姿だと俺は半端なく強くなる。だから、封印してて、「ルビ」が死んだらこの姿に戻るんだよ。」

ア「ふーん。そんな理屈が。」

理「じゃあ、この姿のときの名前は？」

あ・・・そうだよなあ。この姿でルビは・・・ちょっと。

「ああゝっ、名前？名前は・・・（新藤はそのままでもいいや）新しん藤龍氏だ」

こうして龍氏は秘密の内うち一つをうちあげたのだった。

(2) 改めて分かった事がいろいろ (後書き)

すみません・・・。

駄文ですッ！

すみませんッ！ホントウニッ！

お詫び(？)としてなんでもしてください・・・！

え？作者はMですかって？

ソナコトナイヨ？ホントダヨ？

感想お待ちしてまーす！

なお、誤字や脱字、指摘にリクエスト、

感想書いてもらえると嬉しいな♪って事です！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6561x/>

---

武偵高deミッション！

2011年11月21日06時53分発行